

抜いている。またセネガル国内には、他のティジャーニー教団の諸分派も存在している。それにも拘らず、本書で取り上げられている口頭伝承資料の多くが、同教団本部の周辺に位置する宗教指導者や信徒達を媒介したものに限定されているのには聊か疑問が残る。このような口頭伝承資料の偏向の問題は、口頭伝承資料それ自体の信頼性が揺らいでしまう可能性があり、史料批判が十分に為されているとは言い難い。本書は西アフリカ・イスラーム研究における史的研究のひとつの到達点を示唆すると同時に、その困難さをも示している。

もうひとつが、イブラーヒーム・ニヤースを祖とする教団の特徴として取り上げられている神の認識へと至る修行階梯が果たしてこの教団の特徴と言えるのかどうかという問題である。広汎なイスラーム世界において、神の認識を求める信徒達の存在はさほど珍しいことではない。では、何故タルビヤが同教団の特徴として考えられてきたのだろうか。おそらく上述した二つの先行研究においても言及されているタルビヤが、研究者達によって過度にその特異性が強調されたことで、ひとつの「神話」を生み出した可能性は捨てきれない。同時代知識人達のタルビヤも比較検討するなど再度検討されるべきであろう。

イブラーヒーム・ニヤースは、1929年に自身の教団を設立して以来、西アフリカ各地へと布教活動を展開してきた。20世紀のイスラーム世界において、宗教的指導者であると同時に政治的指導者の役割を担ったイブラーヒーム・ニヤースは、イスラーム復興を最もよく体現した人物のひとりであった。それ故に、西アフリカにおけるスーフィズム・タリカ復興現象の実態の解明において、イブラーヒーム・ニヤースを祖とするスーフィー教団を研究することは重要な意味合いがあるのではなかろうか。他の西アフリカのイスラーム知識人に比べ、イブラーヒーム・ニヤースを対象とする研究蓄積は十分に為されているとは言えず、未開拓の研究分野ともいえる。著者 Zachary Valentine Wright を含め研究者の今後の研究が期待される。

<参考文献>

- Hill, Joseph. 2007. "Divine Knowledge and Islamic Authority: Religious Specialization among Disciples of Baay Nas." PhD dissertation Yale University.
- Seeseman, Rüdiger. 2011. *The Divine Flood: Ibrāhīm Niasse and the Roots of a Twentieth-Century Sufi Revival*. New York: Oxford University Press.

(末野 孝典 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Daniel Byman. 2015. *Al Qaeda, the Islamic State, and the Global Jihadist Movement: What Everyone Needs to Know*. New York: Oxford Univ Press. xii+284 pp.

1990年代の冷戦終結と湾岸戦争以降、9.11事件や「イスラーム国」(以下、IS)という新たな脅威が登場し、欧米は反テロ政策を強化し、中東への軍事介入を加速するとともに、国内においてテロへの警戒からムスリムへの監視を強めるようになった。アラブの春によって中東の民主化の可能性が示されたかに見えたが、独裁政権打倒後に安定した国家は生まれず、内戦やテロが中東を支配する状況が続いた。

9.11事件以来、ジハード主義組織に対する研究が盛んとなったが、依然としてテロ事件や欧米の軍事行動が中心であり、ジハード主義組織の言説やイスラーム主義者に対する批判についての研究は多くなかった。また、一般の読者層には、9.11事件やアラブの春、ISの勃興といった際立った事件の前後の状況が知られていないことも多い。

本書は、「すべての人が知るべきこと」と銘打つ通り、アフガン侵攻に始まるアル＝カーイダの前史や湾岸戦争から9.11までのアル＝カーイダの活動、9.11事件からISの登場に至る一般読者の知識の空白を埋める内容となっている。さらに、ジハード主義組織の目標や戦略、反テロ政策のみならず、ジハード主義者の思想をも取り扱い、アル＝カーイダやISをジハード主義運動全体の中に位置づける試みであり、グローバル・ジハードの実態を把握するために必読の書である。

以下では、章別に概略を述べる。

第1章では、9.11事件に至るまでのアル＝カーイダの歴史を再確認している。アル＝カーイダは、アフガン侵攻での「奉仕事務所」を継承し、アフガンを中心に訓練や資金援助などを通じたジハード主義組織のネットワークを構築した。しかし、アル＝カーイダと他のジハード主義組織は異なる目標を持ち、アル＝カーイダの指導権は限定的であったため、アル＝カーイダは、反米路線による各地のジハード主義組織の統合を試みた。9.11事件を受けて加速した米軍の反テロ政策は、アル＝カーイダをアメリカに立ち向かう英雄として権威づけ、求心性を持たせた、という指摘は興味深い。

第2章では、9.11事件も含めてアル＝カーイダが行った攻撃について考察している。9.11事件以前では、アル＝カーイダが直接実行した初めての攻撃である1998年のケニアおよびタンザニアでのアメリカ大使館攻撃が重要である。また、9.11事件は、アメリカの市民を意図的に標的にしたアメリカ本土への攻撃であり、アル＝カーイダが過大評価されるようになった。しかし、アメリカに恐怖を与えムスリムを団結させる目的で実行された9.11事件は、実際にはアメリカの強硬な反テロ戦争とムスリムからの批判を招き、アフガン戦争によってアル＝カーイダは聖域（外敵の攻撃から守られた非正規軍の根拠地）を失い、窮地に立った。

第3章では、目標の違いに応じたジハード主義組織の戦略と戦術について考察がなされている。アル＝カーイダは、現地の体制を操る欧米を攻撃する戦略を採る一方で、現地の体制に対しては、財政基盤となるインフラを攻撃して統治の空白を作ること狙っている。近年では、アル＝カーイダの組織力の低下に伴い、ローンウルフ・テロを奨励することで慢性的な恐怖の維持を狙っているが、訓練の不十分さから、攻撃規模も小さく、成功率も低下していることが指摘されている。この指摘は、近年頻発しているISに忠誠を誓って行われるローンウルフ・テロに関しても当てはまるものであると思われる。テロの脅威を過大評価することなく、従来の法的枠組みの中での対抗策の重要性を再確認する必要があるという指摘は、国際法やイスラーム国際法（スィヤル）の枠組みからグローバル・ジハードを観察しようとする評者にとっては興味深い。

第4章では、アル＝カーイダの思想とそれへの批判を考察している。その中で最も強い影響を与えているのがムハンマドの時代以降3世代（サラフ）のイスラームへの回帰を唱え、神の唯一性の強調やイスラーム法の施行を主張するサラフィー主義である。しかし、アル＝カーイダの暴力性やムスリムへの攻撃に対して、サラフィー主義者やジハード主義者からの批判も多い。アル＝カーイダはそうした批判に対し、アメリカ市民の政治への責任や軍需産業との関係、タクフィールによる正当化を試みたが、権威あるウラマーの多くが反対し、結果としてアル＝カーイダの求心性は低下したことが指摘されている。

第5章では、アル＝カーイダの組織やリクルートにおける特徴を考察している。ジハード主義運動が分裂的であるため、多くの組織が正式に傘下組織となると、アル＝カーイダの影響力の射程が広がる一方で、傘下組織と指導部の目的や戦略の齟齬を統制するのがより困難になる。アル＝カーイダの強みは、資金、ジハード主義者への訓練であり、資金と訓練の供与を通じて傘下組織を統制してきた。その主な資金源はアラビア半島の富裕層からの支援である。9.11事件以後、アメリカのアル＝カーイダ支援者への圧力や資金の追跡などにより、アル＝カーイダの財政は急速に悪化したため、傘下組織の資金による統制が困難になったと分析されている。

第6章では、アル＝カーイダが中東諸国との関係やアラブの春から受けた影響を考察している。アル＝カーイダやISの前身組織は、イラクのスナ派が持つシーア派政権への反感や米軍のイラク占領への抵抗運動を利用し、米軍への抵抗運動を宗派内戦へと変えて影響力を回復しようとした。2006年からの米軍増派とスナ派の包摂政策によって後退したものの、これがのちのISの祖型となった。イランとパキстанは、共通の敵の存在からアル＝カーイダやジハード主義を利用した。その支援によりアル＝カーイダは聖域を確保することができた。サウディアラビアの国民は非公式な資金の流通システムを用いてアル＝カーイダに支援を行い、アル＝カーイダはこれを資金源としてきた。9.11事件以降、サウディアラビア政府は一転して非公式の資金の流通への監視などの措置を講じたが、サウディアラビアの国民は依然としてジハード主義組織にとって重要な資金源である。

アル＝カーイダは常に反イスラエルを唱えてきたが、イスラエルによる激しい報復や自らに敵対的なヒズブッラーやハマスが存在するため、直接の攻撃目標には定めずにプロパガンダ上で敵視し、ムスリムやア

ラブ人の支持を引き付けようとした。アラブの春は、選挙を通じたイスラーム国家の実現の可能性を見せたが、実際には安定した民主国家を確立できず、統治の空白が生まれ、民主主義によるイスラーム国家実現を否定するジハード主義組織がその空白に浸透したと指摘される。

第7章では、アル＝カーイダを中心とするジハード主義組織のネットワークについて考察している。アル＝カーイダは2012～2013年の時点ではもはや攻撃を指揮しておらず、実際には他の組織がアル＝カーイダの名前を利用して攻撃をおこなう方式へとシフトしている。こうした提携により、傘下組織は、もともと反欧米感情の強いイスラーム世界の民衆に訴えかけ、戦闘員をリクルートすることができ、一方アル＝カーイダの指導権がジハード主義運動全体へと及んでいく。しかし、こうした関係は、各地の傘下組織がアル＝カーイダの世界戦略への貢献について両者の間に不和があることで限界づけられている、という指摘は、グローバル・ジハード組織への脅威のパーセプション(認識)が自己増殖していくのを防ぐうえで重要な視点であると評者は考える。

第8章では、ISについて述べられている。ISはアル＝カーイダのイラクの支部組織だったが、いまやアル＝カーイダの最大の敵となっている。ISは、イラクの宗派政策やシリア内戦を利用して支配地域を拡大して徴税や石油の密輸を行い、経済的に自立した。2014年には、カリフ制を宣言し、全てのムスリムに対する指導権を主張したが、それはジハード主義者からも否定されている。ISは近くの敵と戦い、支配領域を確立するとともに、宗派主義的な攻撃により内部を純化することを目標としている。一方で欧米との直接対決は狙わず、欧米人の人質の殺害やローンウルフ・テロの推奨にとどめていくと指摘される。また、攻撃の様子をSNSによって拡散することで、リクルーティングや恐怖戦略を行っている。

第9章では、反テロの効果について考察されている。反テロの主な手段として、空爆、通信傍受やムスリムの監視、刑事司法制度を無視したテロ事件の処理が用いられてきた。しかし市民の巻き添えや自由の侵害、主権侵害といった批判を受けてアメリカの正統性が低下するため、著者は中東の同盟国や刑事司法制度を重要視している。一方で、ISに対しては軍事的対抗策の必要性を強調しており、また現地では軍事的なISの壊滅を主眼に対策が講じられている。脅威のパーセプションに端を発した軍事的対応がジハード主義組織への求心性を高めたのではないかと考える評者はこうした著者の考えに危機の念を禁じ得ない。

第10章では、より深い知識を得るために、ジハード主義組織に関する刊行物を紹介している。紹介されている刊行物の中にISをメインテーマにしたものは少ないが、ジハード主義の歴史の中にISの歴史が織り交ぜられていると著者は述べている。

本書は、アル＝カーイダやISの戦略や思想を概観し、それらをジハード主義運動全体の中に位置付けるとともに、ジハード主義運動に対してどう対応すべきなのかを論じている。また、アル＝カーイダや中東各国のジハード主義組織との類似点や相違点を洗い出すことで、ISが極めて新奇なものであると考えられている現状に対し一石を投じている。これまで反テロといえど軍や情報機関による超法規的な措置といった側面が強く、そうした反テロがアメリカの正統性を貶めたと批判する一方、中東諸国と同盟を組み、法を遵守しながら対処することで、アメリカの正統性を傷つけずにジハード主義組織の組織力を削ぐべきであると主張している。確かに、組織力を失ったジハード主義組織はおのずから求心力を失い、短期的には自壊していくであろう。

残念ながら、本書で提示されている対策は、いずれも軍事的な対策を円滑に実施するための対策である。しかし、軍事的に弱体化したジハード主義組織がイラク戦争やアラブの春による政変や混乱に乗じて移動・拡大したのがISである。今日では、イラクやシリアにおいて勢力圏が縮小したISがリビアなどで活動을続け、各地でISに忠誠を誓ったローンウルフ型とされるテロが頻発している。こうした近況は空爆や治安対策といった対応の限界点を示している。本書で提示された軍事面からのジハード主義組織の分析だけではなく、国際法やイスラーム国際法の観点からグローバル・ジハードを分析する必要性を、評者は痛感している。

(高木 宗一郎 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)